

雲棲株宏の不殺生思想

西村 玲

中国・明末高僧の一人である雲棲株宏(一五三五一—一六一五)は、念仏・戒律・禪を融合した穏和な宗風によって、広く僧俗への教化を行い、高く崇敬されている。株宏の著作は、日本でも同時代の近世に出版されて、近代に至るまで大きな影響を及ぼした。株宏は、近世東アジアにおける宗教思想史において、時代的な特徴を示す一人である。近世日本に流布した不殺生の思想において、その直接的な起点となった株宏の不殺生を考察する。

中国撰述經典である梵網經では、動物や虫魚を殺すことは、輪廻によってそれらに生まれ変わっている自分の父母らを殺すことである、として殺生を禁止した。この不殺生の原理は、インド由来の輪廻説と中国社会における孝道が一体化したものであり、儒教や道教とあいまって発展した。明末の仏教においても、動物を殺すことを戒め(戒殺)、捕らえた鳥獣魚類を放ち生かす放生として、不殺生は広く実行されていた。

十六世紀末から始まったキリスト教の中国布教において、中心人物となったマテオ・リッチ(一五五二—一六一〇)は、その教理書『天主実義』において、輪廻と孝道による不殺生の不合理性を批判し、仏教の説く戒殺放生を愚かしい無意味な行為であると全否定した。リッチ自身は、聖書『創世記』を根拠として、人間が動物を殺すことは天主から与えられた恩恵である

と主張する。

株宏は、出家する前から動物を祭祀の犠牲とすることを止めており、僧侶となってからは魚類のために二つの放生池を作り、禽獣には山中の放生所を設けている。不殺生を畢生の信念とした株宏にとって、リッチの殺生の言は耐え難いものだったろう。株宏は、「親殺しの阿闍世や隋の煬帝は、今生の父母を殺しただけであるが、人の若い時から老年に至るまで動物を大量に殺すことは、過去世の父母を無限に殺すこと」(竹窓随筆)であり、より罪深いことであると主張する。なぜなら、「儒教や道教は現世のことを語るに止まるが、仏法は前世を論じる。すでに無限の過去世を生きる中で、我々は六道を巡ってきた。

六道の衆生は皆、我父母であることは当然」(梵網經義疏發隱)だからである。キリスト教に対しては、梵網經にもとづいて、「殺生は動物を殺すことではなく、自分自身の慧命、魂を殺すことだ」(竹窓随筆)と結論した。不殺生の思想は、現世一生の閉塞から無限の過去世と未来世へ、人の現身から六道の多種多様な存在へと、魂をひらく回路である。

株宏は、この信念にもとづいて『戒殺放生文』や『自知録』を著し、多くの著作や手紙においても、不殺生を倦むことなく説き続けた。『戒殺放生文』の戒殺篇では、誕生日や祖先祭祀、婚礼や宴会における肉食、祈禱や生業における殺生を禁じる。放生篇では、「いずれはなくなる無常の世財である金銭を、放生によって福德という堅財に換えよ」とよびかける。すべての生物は成仏しようという大乗仏教の前提に立って、動物の肉体を救う放生は世間の善心であるが、その魂を救うことは出世間

の大菩提心であるとする。そのために、放生する動物には、阿弥陀仏の名前と経文を聴かせて、来世で西方浄土に往生させることを勧めている。

日本近世においては、まずは律僧を中心として株宏の著作が出版されており、不殺生の思想も律僧を中心に受け止められた。たとえば、株宏は「百千万億の蚕の生霊を熱湯に入れて殺」(山房実録・論虫)して作る絹の禁止を呼びかけた。自らの善悪の行為を数で計算して自省を促す『自知録』では、養蚕業の廃止を五善としている。この絹の禁止の主張は、唐代の道宣の主張を論拠としながら、近世から明治時代までの日本の律僧によって、広く実行された。

「アヒンサー」の実践をめぐる

チベット仏教僧と漢民族信徒の関係

別所 裕介

本論は、仏教規範のひとつである「不殺生戒(アヒンサー)」の実践を取り上げ、その実践を媒介として密接なつながりを構築している現代中国のチベット仏教僧と漢民族信徒の関係の特質を捉えようとするものである。

ここで事例として取り上げる「不殺生」の規範はふたつの含意をもっている。ひとつは、非暴力・不服従運動の父であるマハトマ・ガンディーによる示唆を重要な契機とし、現在のチベット亡命政府の基本方針として打ち出されている。理念的規

範」としてのそれである。亡命政府の首長であるダライラマ十四世は中国に対して領土要求を取り下げざる代わりに、「全チベットを『アヒンサー』の理念に基づく恒久的な自然保護区とすること」を要求している。これは政治的交渉の産物であると同時に、「チベット人が今後、どのような仏教実践の主体として中国に存続していくべきか」という、ナショナルなレベルでの民族のあり方を本土に暮らすチベット人全体に向けて問いかける作用を果たしている。

他方で、当然ながら本土チベットの生活社会では、村落コミュニティにおける「自然本性的規範」としてのアヒンサーが、ナショナルな意味での「チベット人」概念の総体とリンクすることなく黙々と実践されてきた。そうした実践をローカルなレベルで体現するのは、村単位で創建された寺院を束ねる高位の密教僧である。前近代までの伝承では、こうした村レベルで尊崇を集める宗教者が、山の神や水の精霊など、コミュニティのサブシステムにかかわる超常的存在と交感することで、村人が過剰な財を求めて資源を乱獲したり、野生動物を無為に殺傷したりすることのないよう、逸脱を戒める役割を果たしていた。

本論では、このようなアヒンサーをめぐるふたつの条件的布置の元で、「中国人一般」と自分たちとを隔てる重要な差異として言及されるナショナルな意味でのそれではなく、実体としての「殺さない」という自然本性的規範が他民族・他社会との接合面において共通の実践基盤となつている事例を取り上げ、その背景となる社会的諸条件を整理した。